

教材・教具の紹介

楽器「ツリーチャイム」用卓上スタンド

齋 藤 一 雄*

1 楽器「ツリーチャイム」とスタンド

打楽器の一種である「ツリーチャイム」(ウィンドチャイムともいう)は、直径数mmで長さ10cmのチャイムを半音ずつ横に並べ、糸でつり下げたものである。そのチャイムを手や金属棒などで揺らすと、チャイム同士がぶつかり合ってきれいな音が出る。低い音から高い音へ、グリッサンド奏法で流れ星の効果音などに使われている。

手でチャイムに触れるだけできれいな音が出るので、障害の重い子どもたちが容易に音を出すことができ、楽器による表現を可能にする楽器である。しかし、音を静かに止めることはむずかしく、両手や木の棒、布などで挟み込むと止まる。

コンサート用のツリーチャイムは、高価で横幅約60cmもあり扱いにくい、横幅の小さいものでは約20cmのものもある。横に並べないで、まとめてつり下げたものもあり、風が吹くと金属がふれあって鳴るウィンドチャイムもある。

基本的には、600～1200mmの高さのスタンドに固定し、立ったまま使用するが、横幅の小さいものは、片手でつり下げて使用することが多い。障害の重い子どもたちのなかには、立ったまま片手でツリーチャイムを持ち、片手で音を出すことが困難な場合もある。

そこで、卓上に置いて、片手で音を出すことができるように、卓上スタンドを製作した。

2 「ツリーチャイム」用卓上スタンドの概要

1) 使用したツリーチャイム

使用したツリーチャイムは楽器メーカーのものである。一つは、21×21×220mmの角材に、直径9mm、長さ107～170mmの12本の金属棒が糸によってつり下げられている。こちらはひもで下げられるようになっている(写真1)。

もう一つは、直径100mm、厚さ20mmの円形の板に、直径10mm、長さ75～159mmの18本のアルミ棒が糸によってつり下げられている(こちらをウィンドチャイムとする)。こちらは金属の丸環で下げられるようになっている(写真2)。

2) 卓上スタンドの材料

卓上スタンドの材料として底板85×21×220mm 1枚、側板60×12×360mm 2枚、上板60×12×600mm(60×12×800mm) 1枚を使用した(図1・2)。そして、ツリーチャイムは、側板の上部に溝をつくり、ひもを掛けて下げられるようにした。ウィンドチャイムは、上板につり下げ用の金具をつけ、下げられるようにした。

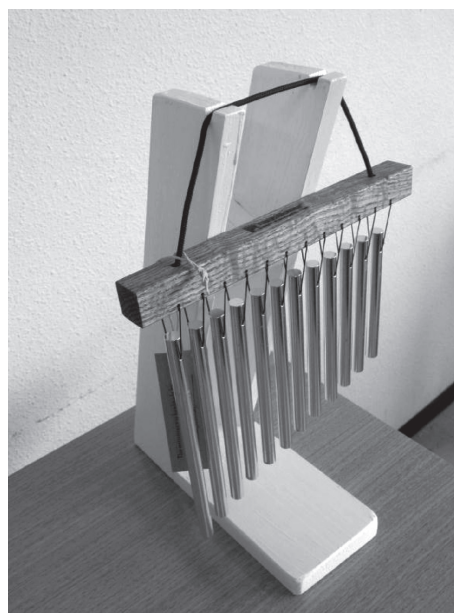


写真1 ツリーチャイムの卓上スタンド



写真2 ウィンドチャイムの卓上スタンド

3) 製作のポイント

○底板は、スタンドが倒れにくいように幅と重さがある板材を選び、側板の幅と厚さに合わせて接合部分を切り取る。その際、側板の立つ角度に合わせて切れ目を入れることがポイントである。

* 上越教育大学大学院学校教育研究科臨床・健康教育学系

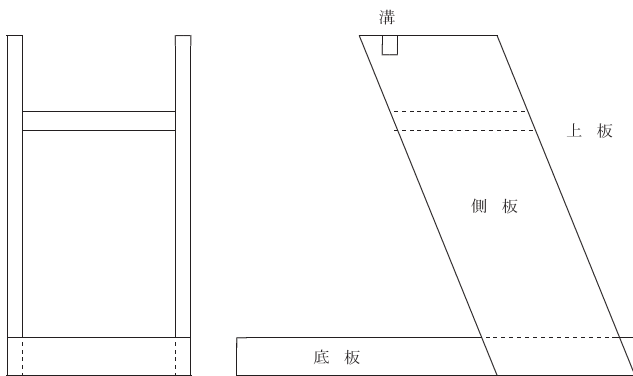


図1 ツリーチャイムの卓上スタンドの正面図と側面図

- 側板の両端には、側面図に合わせて斜め線を引き、のこぎりで正確に切ることがポイントである。
- 上板は、スタンドの形状を安定させるために重要であるが、ツリーチャイムを下げるための溝の深さよりも下げることがポイントである。
- 全面にやすりを掛け、塗料を塗り、きれいに仕上げることもポイントである。
- できあがったものを机の上に置き、イスに座った演奏者の目の高さとはほぼ同じになり、音が出しやすい位置となるか、確かめることもポイントである。

3 指導上の留意点

- ツリーチャイムは、金属棒がふれあうと、きれいな音がすぐに出る。音がしないようにすることと鳴った音をすぐに止めることがむずかしい楽器である。卓上スタンドを動かしたり、揺らしたりすると、すぐに音が出るので注意する。しかし、何もしなくても音は自然と止まる。
- 従って、生徒はイスに静かに座り、姿勢を正しくして、動かないように注意することも必要である。

4 実践例と効果

特別支援学校（知的障害）中学部の「音楽」で、1年生6名、2年生6名、3年生5名、計17名を対象に、題材名「学習発表会で『クラリネットをこわしちゃった』を合奏しよう」において、ツリーチャイムを用いた。17名の生徒は、身のまわりのことは自分でできる生徒が多いが、部分的な支援が必要な生徒も5名いる。また、ほとんどの生徒は日常の簡単な言語指示

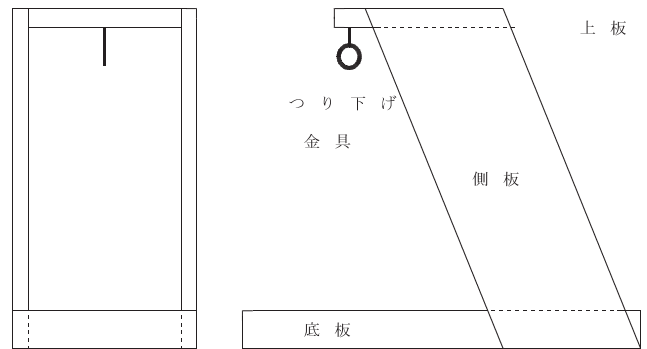


図2 ウィンドチャイムの卓上スタンドの正面図と側面図

を理解し、1～2語文や発声・指さしで要求を伝えることができる。人とのかわりでは、自閉的な傾向を示す生徒もいるが、集団活動に参加でき、約束や決まりを守ることでもでき、生徒同士かかわることができる生徒である。

合奏で使用した楽器は、鍵盤付きハーモニカ、チャイムパー・木琴・鉄琴、ティンパニー、ツリーチャイムの6種3組を選択した。ツリーチャイムの担当は、着替え・トイレは支援が必要で、食事はスプーンを使い、かかわってくれる人が好きなAさん、発語はないが着替え等は声かけででき、音楽を聴いてニコニコしているBさん、右足がせん足で左足に不等緊張があり、右目の視力が弱く、着替え・トイレは支援が必要なCさんの3人である。

3人ともツリーチャイムには自ら手をのばして音を出すことはできるので、音を出す喜び、出すときと出さないときの約束を理解することを目指した。前半休んで「どうしよう」のフレーズから鳴らすようにしたが、Aさんはツリーチャイムを積極的に鳴らし、ツリーチャイムを自分で選んだBさんは、最初からニコニコしながら鳴らしていた。Cさんは、最初は自分の出番がわからずに、身体支援を受けることが多く、泣いたり怒ったりすることもあったが、合奏の練習が進むにつれて、しだいに落ち着き、自分でツリーチャイムを鳴らすことができるようになった。ツリーチャイムのすてきな音と、音の出しやすさという点で、生徒の実態に合った合奏になったのではないかと考える。

また、イスを用意して、出番がくるまですわって待てるようにしたことと、ツリーチャイムが目の前の机の上にあるので、手を出しやすくなったこともよい影響を及ぼしたと考える。